

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02061

研究課題名（和文）近世・近代の尼僧の社会活動 尼門跡の支持者と一般尼寺との比較を通して

研究課題名（英文）Research on Social Activities of Nisos in the Early Modern and Modern periods

研究代表者

岸本 香織 (KISHIMOTO, Kaori)

大手前大学・付置研究所・客員研究員

研究者番号：40440903

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ジェンダー研究及び社会史・宗教史の重要な資料ともなる尼門跡寺院の資料調査・分析を通して、尼門跡の支持者と一般尼寺との比較を中心に、近世・近代における尼僧の社会活動を明確化することを目的とした。研究期間内に、光照院調査を7回実施し、聖教類678件を目録化した。さらに尼寺文書研究会を39回開催し、延享5年（1748）～宝暦12年（1762）の「総持院触留」15冊を講読した。これらの成果をまとめる形で、研究論文3本、光照院聖教目録、「総持院触留」史料集を収載した研究報告書を刊行した。本研究により、尼門跡寺院が社会的宗教活動をもって想定以上の広範囲に支持者を得ていたことが明確となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

光照院調査により、聖教類を目録化して報告書に掲載した。聖教類がまとまって残る尼門跡はこれまでになく、日本の宗教におけるジェンダー研究を進展させる上で貴重な資料となる。「総持院触留」は、講読した15冊を報告書に掲載し、着実に学界へ新資料を提供し続けている。

故澤田宝鏡寺住職への聞き取り、宝鏡寺の歴史、大般若経寄進者分析による近代光照院の支持者層、以上3論考を報告書に掲載した。近世・近代の尼門跡の存在形態が明確となり、その支持者が想定以上の広域にあることが明らかとなった。比丘尼御所（尼門跡）が、伝統的文化を継承するだけの閉鎖的空間ではなく、宗教者としての活動を行う場であったことが、より明確になった。

研究成果の概要（英文）：Our academic project aims to clarify social activities of nisos, Buddhist nuns, in the early modern and modern periods. It aims to research the supporters of Ama-Monzekis, and compare the highest-ranking nun-temples with the general temples. Therefore, historical documents from the Ama-Monzekis are analyzed. These are important for gender studies, social studies and religious history.

We researched Koshō-in documents seven times in the set term and made a list of 678 shogyos; Buddhist holy textbooks. Moreover, we held thirty-nine academic meetings of the nun-temple. Fifteen of the Soji-in documents recorded between 1748 and 1762 were analyzed. We also published an academic report consisting of three papers, a list of Koshō-in shogyo documents, and Soji-in documents. We found that Ama-Monzekis obtained a wider range of supporters than expected, through their social and religious activities.

研究分野：中世史

キーワード：尼門跡 比丘尼御所 尼僧 尼寺 触留

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 11 年度から科学研究費補助金を得て、尼門跡寺院の文書調査を活動の中心とした以下の研究が行われた。

(1) 課題名：「中・近世文書にみる尼門跡寺院の歴史の変遷と生活文化、尼僧の信仰研究」、種目：基盤研究(B)、期間：平成 11～13 年度、課題番号：1141009、研究分野：日本史、研究代表者：相愛大学教授西口順子

尼門跡寺院は、近世に皇女・王女・公家の子女が入寺した比丘尼御所を前身とする尼寺で、京都の大聖寺・宝鏡寺・光照院・曇華院・靈鑑寺・林丘寺・慈受院・三時知恩寺・宝慈院・本光院・瑞龍寺(現在滋賀県) 奈良の円照寺・中宮寺・法華寺である。その多くが近世・近代文書を多数所蔵し、また尼僧の信仰生活と文学・芸能・美術などの宮廷文化が明確となる大量の資料が保存されている。

研究代表者：西口順子は、平成 10 年度相愛大学特別研究助成(課題名「尼門跡寺院の調査と研究」)を得て、前年度に光照院門跡の予備調査を行ったが、その成果をもとに、岡佳子(大手前大学)・牧野宏子(関東学院大学)を研究分担者に、本格的な尼門跡調査を開始した。

本研究では光照院門跡に残る近世・近代文書、絵画・書跡・陶磁器等の美術品を調査し、平成 12 年度から靈鑑寺門跡の調査を始め、平成 13 年度には中宮寺門跡の予備調査を実施した。光照院文書調査はほぼ終了したが、靈鑑寺・中宮寺の調査は完了せず課題として残った。

(2) 「尼寺文書調査を基盤とした日本の女性と仏教の総合研究」、基盤研究(B)、平成 14～17 年度、14310165、日本史、大手前大学人文科学部助教授岡佳子

前研究において文書調査には一定の成果を得たが、近代へと視野を広げ、美術工芸品を調査する必要性、仏教儀礼での尼僧の役割を明確にすること、尼門跡と一般尼寺との比較、古代・中世の女性と仏教の研究成果へのリンクなどの新しい課題が生じてきた。

これらの新課題を盛り込む形で、岡佳子を研究代表者に、研究分担者として西口順子・牧野宏子、前研究で研究協力者であった岡村喜史(龍谷大学)、牛山佳幸(信州大学)、原田正俊(関西大学)、杉田善雄(大手前大学)、高木博志(京都大学)、切畑健(大手前大学)、松浦典弘(大手前大学)を研究分担者に加えて研究組織を構成した。

本研究では、中宮寺・靈鑑寺の文書調査を継続し、平成 15 年度より慈受院門跡を調査に加えた。靈鑑寺調査はほぼ終了したが、中宮寺と慈受院の調査は完了せず課題として残った。また尼寺文書研究会を 7 回開催して、古代から近代までの女性と仏教と女性に関する 13 の報告を行った。最終的には論考と光照院所蔵文書目録とを掲載した報告書を作成、成果を公開した。

(3) 「日本の宗教とジェンダーに関する国際総合研究 尼寺調査の成果を基礎として」、基盤研究(B)、平成 18～20 年度、18310171、ジェンダー、大手前大学人文科学部助教授岡佳子

前研究によって、女性自身の手による尼門跡文書をもとに宗教におけるジェンダーの問題が明確になり、調査に参加した海外研究者との交流を通じて国際総合研究の可能性も見出されたため、中宮寺・慈受院文書調査の終了とともに、これらを課題として設定した。

研究代表者岡佳子。前研究分担者に、中世仏教史の平雅行(大阪大学)、古代仏教史の勝浦令子(東京女子大学)・吉田一彦(名古屋市立大学)、日本絵画史の原口志津子(富山県立大学)、さらに研究協力者であった佐藤文子(佛教大学)を加え、研究組織を構成した。平成 20 年度には、西口順子・杉田善雄・佐藤文子が連携研究者へ移行し、新たに岸本香織(京都造形芸術大学)が連携研究者に加わった。

研究期間内に中宮寺・慈受院の文書調査を終了した。靈鑑寺の書跡・絵画調査の実施し、尼寺研究会を 5 回開催した。平成 19 年 11 月には、米国ハーバード大学において、ライシャワー日本研究所・大阪大学荒木浩・伊井春樹氏の科研プロジェクトと共催で国際シンポジウム"BEYOND BUDDHOLOGUY: NEW DIRECTION IN THE STUDY OF BUDDHISM"を開催し、第一日目"WOMEN AND THE HISTORY OF JAPANESE BUDDHISM"に、研究代表者・研究分担者 11 名と阿部龍一氏(ハーバード大学教授)他、米国研究者 8 名が参加し、基調発表と「宗教とジェンダー」「尼僧の歴史」「尼寺とその周辺」「美術・工芸品に見る女性の信仰」の 4 パネルで報告を行い、研究成果を海外へと発信した。最終年度の平成 19 年度には、4 冊の調査報告書を刊行し、「本文編」には国際シンポジウムの記録、5 編の論文・史料調査概要等を収載した。各門跡の文書目録は、それぞれ「靈鑑寺文書目録」、「中宮寺文書目録」、「慈受院文書目録」に掲載した。

これまでの過去十年間にわたる研究によって、光照院・靈鑑寺・中宮寺・慈受院の 4 ヶ寺の文書調査、日本の女性と宗教に関する論考の報告書掲載刊行、国際シンポジウムにおける海外への成果発信ができたが、膨大な文書を活用して研究の深化を目指すことが課題となった。

(4) 「日本の宗教とジェンダーの研究 近世社会における尼僧と尼寺の役割」、基盤研究(B)、平成 20～24 年度、21310172、ジェンダー、大手前大学総合文化学部教授岡佳子

前研究から、女性自身の手による近世・近代の尼門跡文書によって、寺院を背負う立場にある尼僧たちが積極的に社会に関わっていく姿が明確に浮かび上がってきた。比丘尼御所は閉じられた世界などではなく、社会に開かれた場所であった。この事実は日本の宗教とジェンダーを考える上で極めて重要であると考え、本研究では、尼門跡文書の分析を通じて、近世社会における尼僧と尼寺の役割を明らかにすることを課題目的とし、慈受院門跡所蔵の「総持院触留」の研究、尼僧を中心とした女性ネットワークの研究、比丘尼御所、靈鑑寺門跡の工芸品の調査の 3 点から研究活動を行った。

研究代表者を岡佳子、研究分担者を岡村喜史（平成 22 年度より研究協力者）連携研究者を西口順子・杉田善雄・牧野宏子・佐藤文子・岸本香織（平成 23 年度より研究分担者）研究協力者を切畑健、加えて水谷友紀（平成 22 年度より連携研究者、平成 24 年度より研究協力者、元興寺文化財研究所）・青谷美羽（平成 22 年度より連携研究者、京都造形芸術大学）で研究組織を構成した。さらに平成 22 年度より原口志津子が連携研究者、平成 23 年度より高橋大樹（大津市歴史資料館）が研究協力者として加わった。

本研究において、尼寺文書研究会を 34 回開催、公儀が比丘尼御所に下した触を収録した慈受院蔵「総持院触留」20 冊（元禄～享保初期）を翻刻し、また霊鑑寺の美術工芸品調査を実施した。「総持院触留」翻刻と論考を収録した報告書を作成し、研究成果を公開した。

しかし江戸中期以後の触留帳は未翻刻のまま残り、さらに霊鑑寺調査の過程で多量の日記・文書が新出史料として出現し、これらの調査・研究は将来の課題として残った。また新たな研究課題として、尼門跡寺院（比丘尼御所）を中心とする公武方女性ネットワークの問題も生じてきた。

(5) 「近世・近代の尼門跡を中心とした女性ネットワークの研究」、基盤研究（C）、平成 25～27 年度、25360056、ジェンダー、大手前大学総合文化学部非常勤講師岸本香織

本研究では、これまでの研究成果を基盤としながら、さらなるジェンダー資料の充実を計るとともに、従来、閉鎖的な空間と考えられてきた尼門跡寺院が開かれた場所であり、そこで尼僧と周辺の公武女性たちが社会に積極的に関わる実態を明確にすることを目的とした。そのために、霊鑑寺文書調査、「総持院触留」の翻刻という継続課題に加え、新たな課題として尼門跡寺院の尼僧を中心とした公武方女性ネットワーク研究という課題を設定し、霊鑑寺の新出文書の調査、尼寺文書研究会の開催と慈受院蔵「総持院触留」の講読、近世・近代の尼門跡（比丘尼御所）を中心とした女性ネットワークの研究、この 3 方向から研究をすすめた。

研究代表者を岸本香織（京都造形芸術大学、平成 26 年度より大手前大学）、研究分担者を岡佳子・青谷美羽、連携研究者を杉田善雄とし、研究協力者に西口順子・岡村喜史・盛田帝子（大手前大学）・高橋大樹・水谷友紀（生駒市文化財調査員）を加え、研究組織を構成した。

本研究において、尼寺文書研究会を 30 回開催、公儀が比丘尼御所に下した触を収録した慈受院蔵「総持院触留」20 冊（享保後期～延享）を翻刻し、また霊鑑寺の新出文書調査を実施した。霊鑑寺文書目録と「総持院触留」翻刻及び論考を収録した報告書を作成し、研究成果を公開した。

これらの研究によってジェンダー資料の充実を計るという継続課題は、順調な成果を得ることができたが、「総持院触留」の翻刻は、まだ一部を終えたにすぎず、幕末まで 120 点余が残る。また、課題としてあげた尼門跡を中心とした女性ネットワークの研究は、個々の研究において進捗を見せたとはいえ論考としてまとまった部分は僅かにとどまる一方、尼門跡と一般尼寺との比較考証、特にその支持者を考えるという問題が浮かび上がってきた。内容的に十分な成果をあげたとは言い難く、これらの諸点が将来の課題となった。

2. 研究の目的

現在、京都・奈良には、近世に皇女・王女・公家の娘が入寺した比丘尼御所を前身とし、明治 21 年から尼門跡の呼称が許可された 9 ケ寺の尼寺が残る。本研究では、前述の研究成果を基盤としつつ、(1) 尼門跡寺院の文書調査、(2) 尼寺文書研究会の開催と慈受院蔵「総持院触留」の講読、(3) 比丘尼御所（尼門跡）支持者の研究、(4) 比丘尼御所（尼門跡）と一般尼寺との比較研究、これらを課題とする研究を進め、ジェンダー資料の充実を計るとともに、比丘尼御所の尼僧たちを支えた在俗支持者たちの実態を明らかにし、更に比丘尼御所と一般尼寺との比較も行う。そこから尼僧たちの社会活動の基盤を明確にし、ジェンダー研究に新しい成果をもたらすことを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究の役割と研究課題の設定

本研究において、研究代表者・研究分担者・連携研究者はそれぞれ役割を定めるとともに、比丘尼御所（尼門跡）の支持者や一般尼寺との比較研究に関する課題を設定して研究を進めた。

研究代表者：岸本香織（研究の統括・調査の実施・研究会の開催、光照院歴代とその周辺に関する調査研究）研究分担者：岡佳子（尼寺文書研究会「総持院触留」講読の準備と実施、調査の準備と実施）・青谷美羽（光照院日記資料調査の準備と実施、調査結果の整理、近世・近代の尼門跡及び一般尼寺の資料収集）連携研究者：杉田善雄（「総持院触留」史料集の編纂指導）。これに加え、研究協力者として西口順子（研究全般に対する指導・助言）・岡村喜史（「総持院触留」編纂補助）・盛田帝子（光照院調査補助）・高橋大樹（「総持院触留」講読補助）・水谷友紀（光照院調査補助）が参加した。

(2) 光照院の聖教類・新出文書の調査

平成 28 年度（2 回）

・9 月 10～11 日、2 月 4～6 日

書画類の整理・再調査、新出文書や聖教類の調書作成、日記の写真撮影。

平成 29 年度（2 回）

・9 月 9～11 日、2 月 9～11 日

新出文書や聖教類の調書作成、日記の写真撮影。

平成30年度(2回)

・9月16~18日、2月16~18日

新出文書や聖教類の調書作成、日記の写真撮影。

平成31年度(1回)

・9月14日~16日

新出文書や聖教類の調書作成、聖教類調書作成終了、成果データの確認・整理、目録化(全678件)日記の写真撮影。

(3) 尼寺文書研究会の開催

本研究では、通常月1回の割合で尼寺文書研究会を開催し、朝廷・幕府から武家伝奏を通じ比丘尼御所に発給された公儀触、及び比丘尼御所から武家伝奏を通じ朝廷・幕府へ提出した文書を書き留めた慈受院蔵「総持院触留」を研究組織全員が分担箇所を決め、それらを講読、翻刻を行った。さらに、平成29・30年度には研究報告も実施した。会場は全回アスニー山科。

その概要は以下の通りである。

平成28年度 第77~85回(全9回)

日程:5月8日・6月5日・7月3日・8月6日・10月10日・11月13日・12月11日・1月22日・3月12日

内容:延享5年~宝暦3年「総持院触留」(6冊)の講読。

平成29年度 第86~95回(全10回)

日程:4月9日・5月7日・6月3日・7月23日・8月19日・10月1日・11月3日・12月24日・1月28日・3月21日

内容:宝暦4~8年「総持院触留」(5冊)の講読。

同志社大学大学院生森山郁真による研究報告『「室町将軍と造像」~六代義教を起点として~』(第92回、11月3日)。

平成30年度 第96~105回(全10回)

日程:4月22日・5月13日・6月3日・7月22日・8月12日・10月8日・11月10日・12月15日・1月27日・3月10日

内容:宝暦9~12年(4冊)の講読。

同志社大学大学院生横地智による研究報告『須原屋市兵衛の出版活動 その書肆像の見直し』(第105回、3月10日)。

平成31年度 第106~115回(全10回)

日程:4月14日・5月3日・6月23日・7月13日・8月25日・10月13日・11月10日・12月14日・1月16日・2月9日

内容:前年度までの講読分計15冊を報告書掲載のために再読、岸本香織・岡村喜史が史料校訂と史料集原稿作成を担当、岡佳子がこれを補助。

(4) 研究報告書の作成

最終年度である平成31年度には、今回の研究成果をまとめるため、尼寺文書研究会における慈受院蔵「総持院触留」の講読、光照院聖教目録及び各研究者の研究を収載する研究報告書(全220頁)を編集、令和2年2月29日に刊行した。内容は下記の通りである。

研究概要

岸本香織

論考

尼寺の生活記録 宝鏡寺門跡澤田恵 璣氏の話より 西口順子

宝鏡寺の歴史 岡佳子

近代光照院の支持者層 「大般若経」寄進者の分析を通して

岸本香織・青谷美羽

光照院聖教目録

光照院聖教について 青谷美羽

慈受院蔵「総持院触留」史料集

慈受院蔵「総持院触留」 延享五年から宝暦十二年の翻刻 岸本香織

4. 研究成果

「近世・近代の尼僧の社会活動 尼門跡の支持者と一般尼寺との比較を通して」と題した本研究では、(1)尼門跡寺院の文書調査、(2)尼寺文書研究会の開催と慈受院蔵「総持院触留」の講読、(3)比丘尼御所(尼門跡)支持者の研究、(4)比丘尼御所(尼門跡)と一般尼寺との比較研究、これらを課題とし、ジェンダー資料の拡充とともに研究の進展を図った。

39回の尼寺文書研究会を開催して、慈受院蔵「総持院触留」の講読と翻刻を行った。約160冊に及ぶ「総持院触留」のうち15冊ではあるが、史料集として報告書に掲載することができた。僅かずつではあるが、前研究から引き続き、着実に学界へ新資料を提供し続けている。報告書に掲載した解題「慈受院蔵「総持院触留」 延享五年から宝暦十二年の翻刻」(岸本香織)にて述べている通り、本史料は『京都町触集成』『妙法院日次記』収載の公儀触との比較が可能であり、書写に不備のある公儀触についても相互に補完が可能となるため、本史料集公刊の意義は大きい。

光照院門跡の新出文書及び聖教類約840点についても調査、聖教類は目録化し報告書に掲載

できた。聖教類がこれほどまとまって残る尼門跡はこれまでになく、重要な資料目録となる。過去に未調査のままとされた光照院文書の聖教類を調査することにより、比丘尼御所(尼門跡)が、伝統的文化を継承していくだけの閉鎖的な空間ではなく、宗教者としての活動を行う場であったことが、より明確になった。これらが日本の宗教におけるジェンダー研究を進展させる上で貴重な資料となることは間違いない。

また、研究期間中に関係資料の調査・収集も行っている。青谷美羽は宮内庁書陵部等に出張し、近世・近代の尼寺に関する資料の調査・閲覧を行った。宮内庁書陵部では資料撮影も合わせて実施し、加えて京都市歴史資料館でも資料複写を行い、4年間で約250点の資料収集を終えた。

報告書には、論考3本も掲載した。西口順子は、平成8年に当時宝鏡寺住職であった故澤田恵瑾氏に行った聞き取り内容を整理、原稿化した。戦前戦後の尼門跡寺院を直接知る住職がほとんどおられなくなった現在、かつて住職が残されたことばを記録、公表することは大いに意義があるものである。岡佳子は、宝鏡寺の歴史について、室町時代から江戸時代までの住職を簡潔にまとめた論考を執筆し、西口の論考を補完している。岸本香織と青谷美羽は共著で、光照院に伝存する大般若経寄進者の分析を行い、近代光照院の支持者層に関する論考を執筆した。これらの諸研究から、近世・近代の尼門跡の存在形態を明確にするとともに、その支持者が想定以上に広い地域にあることが明らかとなってきた。

これらの研究によってジェンダー資料の充実を計るという継続課題は、順調な成果を得ることができたが、「総持院触留」の翻刻は、まだ一部を終えたにすぎず、幕末まで100点以上が残る。また、課題としてあげた「比丘尼御所(尼門跡)支持者の研究」と「比丘尼御所(尼門跡)と一般尼寺との比較研究」については、前者は光照院文書の聖教類によって大きな成果を得たが、後者については資料収集の不足等から、一般尼寺の存在形態について、尼門跡と比較し得るに足る程度に明らかにすることができなかった。個々の研究は進捗を見せつつも、論考としてまとめた部分は僅かである。課題としていた尼門跡と一般尼寺との比較考証が成果をあげられずに残ったことに加え、近代以降の尼寺について伝統継承の実態を明確にする必要があるという問題も浮かび上がってきた。これらの諸点を将来の課題として研究を継続していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岸本香織	4. 巻 なし
2. 論文標題 「翻刻『平田職直日記』茶の湯関係記事」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『仁清 金と銀』	6. 最初と最後の頁 160-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岸本香織	4. 巻 400
2. 論文標題 尼門跡寺院の調査・研究－近世公家社会における比丘尼御所の資料－	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地方史研究協議会「地方史研究」	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 なし
2. 論文標題 唐物「道具」の価値 茶壺と茶入を中心に－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 貿易陶磁研究会研究集会	6. 最初と最後の頁 45 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 なし
2. 論文標題 寛永文化の茶匠と道具 鳳林承章のまなざしから－	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 特別展図録『江戸時代初期の茶の湯』	6. 最初と最後の頁 5 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 19
2. 論文標題 京都府の陶磁器の近代 - 内国勸業博覧会関係史料を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大手前大学史学研究所研究報告第19号『関西窯業の近代』	6. 最初と最後の頁 7-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 なし
2. 論文標題 「唐物道具の価値 茶壺と茶入を中心に」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『第38回貿易陶磁研究会研究集会 貿易陶磁の格差を考える 発表要旨』	6. 最初と最後の頁 49 58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 なし
2. 論文標題 'The Changing Value of "Thigs" :From Gusoku to Dogu'	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 "Around Chigusa Tea and the Arts of Sixteenth-Century Japan "	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 6月号
2. 論文標題 「仁清と乾山 その形と絵」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『なごみ』	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 なし
2. 論文標題 「茶の湯とやきもの」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 平成25年度大手前大学公開講座講義録『集う 衣・食・住・遊』	6. 最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡佳子	4. 巻 第16号
2. 論文標題 「関西の陶磁器の近代」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『関西窯業の近代』大手前大学史学研究所研究報告	6. 最初と最後の頁 6-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡村喜史	4. 巻 第260号
2. 論文標題 「真宗史における「石山」呼称の受容 近世～近・現代」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『ヒストリア』	6. 最初と最後の頁 53 - 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 盛田帝子	4. 巻 第216号
2. 論文標題 「研究の新たな潮流 和歌文学を中心に」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『文学・語学』	6. 最初と最後の頁 64-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 仁清 - 色絵陶器の完成
3. 学会等名 やきもの大学2018年度前期講座『ふたたび京のやきもの』（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 乾山と古清水 - 江戸時代中期までの京焼
3. 学会等名 やきもの大学2018年度前期講座『ふたたび京のやきもの』（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 野々村仁清の焼物について
3. 学会等名 古田織部美術館主催講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡佳子（パネリスト）
2. 発表標題 桃山の茶陶～どのようにつくられ、どのように売られたか～
3. 学会等名 根津美術館特別展『新・桃山の茶陶』シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 「唐物道具の価値 茶壺と茶入を中心にー」
3. 学会等名 第三八回貿易陶磁研究会研究集会 貿易陶磁の格差を考える
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 「平安から鎌倉時代の道具と具足」
3. 学会等名 藝能史研究会10月例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 “ Changing Concepts of the Value of ‘ Things ’ in Japan: From Gusoku to Dogu ”
3. 学会等名 SISJAC Workshop “ The History of Art Collecting and Patronage in Chanoyu ”
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岡佳子
2. 発表標題 「西宮の戎かきの芸能」
3. 学会等名 西宮市大学交流センター大学共同講座 『この街、わが街、にしのみや』
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 盛田帝子
2. 発表標題 「家集を出版すること－賀茂季鷹『雲錦翁家集』を巡って－」
3. 学会等名 平成二十八年度日本近世文学会秋季大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 盛田帝子
2. 発表標題 「日本文学における越境 光格天皇時代の歌人達」
3. 学会等名 ドイツ国ハイデルベルク大学主催 前近代日本文学研究会シンポジウム 境界・中間・越境 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 盛田帝子
2. 発表標題 「公家歌人の宣長評価」
3. 学会等名 本居宣長記念館主催 平成28 年度宣長十講 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 盛田帝子
2. 発表標題 「光格天皇時代の京都歌壇と宗卍院良廣律師 芝山持豊・賀茂季鷹等との交流を通して 」
3. 学会等名 宮城県伊具郡丸森町教育委員会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 MOA美術館、西田宏子、岡 佳子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 淡交社	5. 総ページ数 192
3. 書名 『仁清 金と銀』	

1. 著者名 杉田善雄（共著）（妙法院史研究会）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 八木書店古書出版部	5. 総ページ数 372
3. 書名 『妙法院日次記』第25	

1. 著者名 藤田覚、大谷俊太、海野圭介、久保田啓一、青山英正、浅田徹、神作研一、加藤弓枝、勢田道生、山本嘉孝、鍛冶宏介、一戸涉、合山林太郎、盛田帝子、菊池庸介、岸本香織（p333-337）、飯倉洋一、鈴木淳、山本和明、編：飯倉洋一、盛田帝子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 408
3. 書名 『文化史のなかの光格天皇』	

1. 著者名 公益財団法人冷泉家時雨亭文庫編（田中倫子が草稿を作成、赤瀬信吾・上野武・大山和哉・岸本香織・田中・橋本正俊・藤本孝一・美川圭が検討し翻刻）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝日新聞社	5. 総ページ数 590
3. 書名 『翻刻明月記三 自安貞元年至嘉禎元年』	

1. 著者名 岡佳子 (竹内順一、岡佳子、ルイズ・コート、アンドリュー・M・ワツキー編)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 247 (158 - 178、179 - 184、206 - 211)
3. 書名 『「千種」物語 二つの海を渡った唐物茶壺』	

1. 著者名 岡佳子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 大手前大学史学研究所	5. 総ページ数 213
3. 書名 『関西窯業の近代』大手前大学史学研究所研究報告第16号	

1. 著者名 青谷美羽 (佛教史学会編)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 410 (298)
3. 書名 『仏教史研究ハンドブック』	

1. 著者名 岡村喜史 (金龍 静・木越 祐馨編)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 宮帯出版社	5. 総ページ数 320 (202 - 220)
3. 書名 『顯如』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	青谷 美羽 (AOTANI Miu) (10578719)	京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師 (34319)	
研究分担者	岡 佳子 (OKA Yoshiko) (50278769)	大手前大学・総合文化学部・教授 (34503)	